日本風景論

加藤典洋

……これらのことは何を語っているのか。

それは、風景がどのようにわたしたちに問いかけるかの冒頭近く置かれた問いたいする二つの答えを用意しないだろうか。その既知の未知化、未知[illegible]見えている既知の[illegible]風景」という装置を使って人々に知らせた。という事態を[illegible]風景とはここで何より、単なる未知のものでもなければ単なる既知のものでもない未知と化した既知の「現れ」なのだ。人々は、自分の身の回りにあるものが、それ自体何一つ変わっていないのに、それが全く違うものに見える、あるいは見えていたにもかかわらずそのことに気づかなかった、ということ、そのことをとを教えられて驚いた。『日本風景論』は日本の若者を「山」に駆りたてたが、「ディスカバー・ジャパン」は都会の若い女性を「地方」へと誘った。

講談社

日本風景論

加藤典洋

……これらのことは何を語っているのだろう。
それは、風景がどのようなものとして人に働きかけるか、という直観深く囁かれた問いにたいする一つの答えを用意しないだろうか。ここに取りあげた一つのものは、既知と思われていたものがいつのまにか未知のものとなっている、その既知の未知化、未知のものとして見えている既知のものを風景という装置を使って人々に知らせた、という事態をとらえ、風景とは、ここで何より、単なる未知のものでもなければ単なる既知のものでもない未知と化した既知の「現れ」なのである。
人々は、自分の身の回りにあるものが、それ自体何一つ変わっていないのに、それが全く違うものに見える、あるいは見えていたにもかかわらずそのことに気づかなかった、という、
その一つのことをとを教えられて驚いた。『日本風景論』は日本の若者を「山」に駆りたてたが、
「ディスカバー・ジャパン」は都会の若い女性を「地方」へと誘なった。

講談社

加藤典洋　1948年山形県に生まれる。東京大学文学部卒業後、国会図書館に勤務。現在、明治学院大助教授。
著書に『アメリカの影』（河出書房刊）、『批評へ』（弓立社刊）、『君と世界の戦いでは、世界に支援せよ』（筑摩書房刊）等がある。

日本風景論

1990年1月20日　第1刷発行

著　者　加藤典洋
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二
電話東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）
印刷所　信毎書籍印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
定　価　一九〇〇円（本体一八四五円）

乱丁本・落丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。
© Norihiro Kato 1990, Printed in Japan

ISBN4-06-204433-1　（文1）

目次

「まさか」と「やれやれ」……5
一九五九年の結婚……53
新潟の三角形……101
武蔵野の消滅……155
「大」・「新」・「高」……203
風景の影
Ⅰ　水銀柱の上の空白……256
Ⅱ　ポンペイの透明人間……294
あとがき……332

装幀　戸田　ツトム

写真　小玉　敏勝

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.co

日本風景論

「まさか」と「やれやれ」

1

最近、ハードボイルド・タッチのエンターテインメント小説を訳す機会があり、色々と教えられるところがあった。小説は、フランスの新人作家のものだが、英語からの翻訳を装うという手のこんだもので、文体はアメリカン・ハードボイルドに非常に近いらしい。そのあたり、専門家でないぼくには、よくわからない。ただ、翻訳していて、なるほどと思うことがいくつかあった。今回書こうとすることは、その「なるほど」のうちの一つに関係している。

小説を訳していると、登場人物の幾人かについて、そのまま直訳すると「彼は何やら意味の聞きとれない言葉をもごもごと呟いた」とでもするほかない表現が幾度か繰り返される。これをどう訳せば小説の気分に一番よく合う日本文が得られるか。最後に思いあたったのは、「やれやれ」である。

やれやれ。

「やれやれ、と彼は思った」。こう訳せば、このアメリカン・ハードボイルド・タッチの小説の気分はうまく日本語にうつしかえられる。そう思った時、このような「やれやれ」という用法が、いつから日本語の小説に現れることになったか、そんなことがふと気にかかった。

ぼくの限られた読書歴からいって、こうした特殊な「やれやれ」が日本語の小説あるいはエッセーに現れるのは、村上春樹の小説をもって嚆矢(こうし)とする。しかも、この種の「やれやれ」をこわばりなしに「使いこなせる」のは、村上春樹のほかに、高橋源一郎くらいではないかと思う。では、この村上春樹の「やれやれ」は、従来の日本語の「やれやれ」とどのように用法が違い、それは彼の小説のどのような性格を語っているか。

ぼくの観察するところ、村上の「やれやれ」は、その「まさか」とともに、彼の小説の水面に浮かぶウキのような役目を果たしている。それは、彼の小説の一性格をかなり深く規定しているといってよいだろう。「やれやれ」は、彼の小説に一貫して顔を出すが、その多くは登場人物の会話の言葉としてであり、その特徴をより示す地の文に用いられた場合のそれは、ある時期に片寄った使用例を見せる。一九八一年から八三年にかけての、長篇小説でいえば『羊をめぐる冒険』、短篇小説でいえば、『カンガルー日和』所収の作品の執筆時期が、その時期にあたる。(一方、「まさか」のほうは、処女作『風の歌を聴け』、『羊をめぐる冒険』で特徴的な用法を見せ、その後は、会話の中に時折り散見される程度にすぎない。しかし、「やれやれ」との関係で、ぼくはこの「まさか」も重要であると考える)

さて、村上の小説のなかに、この「やれやれ」は、このように現れる。

引例一。

若い女の子って退屈だよ、というのが我々の仲間の統一見解である。(……)

事実、若い女の子たちの十人中九人までは退屈な代物である。しかしもちろん、彼女たちはそんなことに気づいてはいない。彼女たちは若く、美しく、そして好奇心にみちている。退屈さなんて自分たちとは無縁の存在だと彼女たちは考えている。

やれやれ。

僕はなにも若い女の子たちを責めているわけではないし、また嫌っているわけでもない。それどころか、僕は彼女たちが好きだ。彼女たちは僕に、僕が退屈な青年であった頃のことを思い出させてくれる。これはなんというか、とても素晴らしいことである。(傍点引用者)

これは、『カンガルー日和』所収の「32歳のデイトリッパー」の一節。一九八一年の作である。同じ短篇集所収の「チーズ・ケーキのような形をした僕の貧乏」では、こんなふうに現れる。話題になっているのは語り手が昔「一九七三年だか四年だか」に住んでいた、二つの電車の線路にはさまれた「チーズ・ケーキのような形」をした場所に建つアパート。目の前、窓のすぐ先を電車が走っていく。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

引例二。

でも終電が通ってしまえばあとは静かじゃないかとあなたは言うかもしれない。まあ普通はそう考える。僕だって実際に引越してくるまではそう考えていた。しかしそこには終電なんて存在しなかった。旅客列車が午前一時前に全部の運行を終えてしまうと、今度は深夜便の貨車の列がそのあとをひきついだ。(……)その繰りかえしが来る日も来る日も蜒々とつづくわけだ。

やれやれ。

我々がわざわざそのような場所を選んで住んだのは一にも二にも家賃が安かったからだ。(……)我々は結婚したばかりで、自慢するわけじゃないけれど、ギネス・ブックに載ってもおかしくないくらい貧乏だった。

(傍点引用者)

最後に、『羊をめぐる冒険』から適切な例を一つ。主人公の「僕」が酔っ払って朝帰りする。

引例三。

八歩めで立ちどまって目を開け、深呼吸をする。軽い耳なりがした。錆びた鉄条網のあいだを抜けていく海の風のような耳なりだった。そういえばしばらく海を見ていないな。

七月二十四日、午前六時三十分。海を見るには理想的な季節で、理想的な時刻だ。砂浜はまだ誰にも汚されてはいない。波打ちぎわには海鳥の足あとが、風にふるい落とされた針葉のようにちらばっている。

海、か。

僕は再び歩きはじめる。海のことはもう忘れよう。そんなものはとっくの昔に消えてしまったのだ。

十六歩めで立ち止まって目をあけると、僕はいつものように正確にドアのノブの前にいた。郵便受けから二日ぶんの新聞と二通の封書を取り出し、小脇にはさむ。そして迷路のようなポケットからキー・ホルダーをとり出し、それを手に持ったまま冷やりとした鉄のドアにしばらく額をつけた。耳の後ろ側でかちんという小さな音がしたような気がした。体が綿のようにアルコールを吸い込んでいるのだ。比較的まともなのは意識だけだ。

やれやれ。

ドアを1/3ばかり開けてそこに体をすべりこませ、ドアを閉める。玄関はしんとしていた。必要以上にしんとしていた。

（「海のことは」以下と「やれやれ」の傍点引用者）

しかし、いつもこのように「やれやれ」が村上において用いられているといっては言いすぎだろう。ぼく達の記憶にとどまり易い「やれやれ」は、たとえば次のような会話中の「やれやれ」

（引例四）であり、あるいは、「とため息をついた」で受けられる種類の「やれやれ」（引例五）である。

引例四。

「そんなにお酒飲んで車を運転できるの？」とその子が心配そうに訊いた。

「心配ない」と僕は言った。「僕はアルコールに関してはアンダー・パーなんだ」

「アンダー・パー？」

「四杯飲んだくらいでちょうど普通になるんだよ。だから何の心配もない。大丈夫」

「やれやれ」と彼女は言った。

（「ファミリー・アフェア」、傍点引用者）

引例五。

仕方がないので僕は無音のTVの画面をにらみながら、ビールを飲むことにした。TVでは古い戦争映画をやっていた。ロンメル将軍が出てくるアフリカ戦線ものだ。戦車砲が無音の砲弾を撃ち、自動小銃が沈黙の弾音をばらまき、人々は無言で死んでいった。

やれやれ、と僕はその日十六回目の——たぶんそれくらいになっているはずだ——ため息をついた。

（同前、傍点引用者）

引例一―三と引例四―五の関係を、ぼくは前者が、後者に潜在する「やれやれ」の特質を引きだし、肥大化させたものであるというかたちでとらえておきたい。つまり、村上の小説のあちこちにジャブのように頻出してくる「やれやれ」、それが村上の小説においてもっている微妙な意味あい、他の小説家の作品におけるのとは異なる用法の意味が、前者の引例においてはじめて明らかになる。引例四―五における「やれやれ」は、文体・ディスクールの違いからくる差異を別にすれば、たとえば次のような高橋源一郎の作品に現れる「やれやれ」とそれほど異質であるとは見えない。

引例六。

〔「2×30×12のための2×12」と題する作品において、まず「2×30×12について」と小タイトルのふられた文が書かれるが、話はやがて『森の木かげでどんじゃらホイ』について」、『るそんすけざえもん』について」と逸脱（?）し、それからようやく、本題につながる「2×12について」に戻る〕

やれやれ、やっと2×12に戻りました。

どういう次第だったかというと、こういう次第だったのです。

（高橋源一郎「2×30×12のための2×12」、傍点引用者）

しかし、ここに次のような「やれやれ」の用法を並べてみるなら、特に引例一―三に見られる村上の「やれやれ」が、これまで日本の文学、日本語の文章に現れてきた「やれやれ」と、微妙にだが、はっきりと違っていることは、誰の眼にも明らかに、感じられるのではないだろうか。秋山駿は、最近上梓された『簡単な生活者の意見』に収めた表題エッセーを、こう書きはじめている。

引例七。

どうもこの頃は、ああやれやれ、と思うことが多い。どちらを向いても、やれやれ、と思う。うっかりすると、風呂に潰っていい気分になりながら、いつの間にかやれやれと独りごちている。むろん、四十男が思わずやれやれと嘆声を発するような対象が、この人生という呆れ返った実在以外にある訳もない。

そして、それ以上に、私はしだいに、人生の或る光景やその中の人間的な急所を眺めても、以前のようには、うっかりした軽率な感想を洩らさないようになった。用心深くなった子供のように、自分を監視する。つまり、何も言う言葉がなく黙り込んでしまうことが多くなった。これを要するに、私はしだいに衰弱しているのであり、いわば、自分は生きにくいと、しだいに深く感ずるようになったのである。

この興味深いエッセーは、一九七五年に書かれた。秋山は、この時四十五歳。もう少し引いてみよう。右につづけて、

この人生という実在が、私が考えていたような光景のものではないということが、しだいに腹の底深く染み透って感ぜられるようになってくる。そうだとすれば、私は、この生の行程において深く何かを間違ったのであり、過誤の生を生きてきたのだということになる。そしてたぶん、一度書かれてしまったノートが白紙に戻らぬように、もうこの生の訂正は利かない。

（『簡単な生活者の意見』、傍点引用者）

ところでぼくは、こう感じる。この秋山の文章にすぐにつづけて、

やれやれ。

とここにさらに一行を置いてみる。すると、これが、あの村上の「やれやれ」になる、と。

2

「やれやれ」は「やれ」から来ている。「やれ」という感動詞は、小学館の『日本国語大辞典』にこう書かれている。①人を呼ぶ時にいうことば。特に、目下の者を呼ぶ時に用いる。おい。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com